

〈報告〉

大学生における達成動機と劣等感との関連

山田 真行*・水野 基樹*

Relation between Achievement Motivation and Inferiority Feeling
in University Students

Masayuki YAMADA* and Motoki MIZUNO*

1. 緒 言

感情はあらゆる日常場面で生起され、動機づけや行動に影響を与える重要な概念であり、社会的・学術的に解明が求められている。感情の動機づけ機能に着目した McClelland (1953) は「一次的な感情、二次的な動機」という動機説を提唱し、人間が達成行動を引き起こす心的メカニズムを報告している。すなわち、達成動機を解明する上で感情の役割に言及することは有意義と言えよう。

これまでの感情研究では、怒り、不安、恐怖、罪悪感、恥、悲しみ、ねたみ、嫉妬、嫌悪、幸福、誇り、安堵、希望、愛、同情などが報告されている (Smith et al., 2003)。とりわけネガティブな感情における動機づけ機能に着目すると、防衛機制すなわち人間の存在が脅かされようというときに心理的な安定を保つための反応として、ある行動が引き起こされることが報告されている。すなわち、感情は「心理的な平衡状態」へ働きかけを行う側面がある。このような感情の働きは人間をある行動へと向かわせる動機の源泉であると考えられる。しかしながら、人間を目標達成へと向かわしめるモチベーションの観点に立脚すると、「平衡状態」ではなく「克服」という目標設定が適切であるように思われる。

このような「克服」へと向かわせる感情の動機づけ機能に着目すると、「劣等感」という感情が考えられる。劣等感とは既述のネガティブな感情と同様に、心理的安定を求めて逃避行動などを生起させ、過度な劣等感はときに神経症まで引き起こすことが報告されている (中島ら, 1999)。その一方で、先行研究からは劣等感を感じるゆえに克服へと動機づけられる事象も数多く見受けられる。たとえば、輝かしい成功を収めた偉人の多くは、そのプロセスにおいて劣等感を感じていたという逸話が多く残されている。このように、劣等感を感じることは正常なことであり、劣等感とはネガティブな回避行動を引き起こす動機づけ機能を有する半面、克服などポジティブな達成行動を引き起こす動機づけ機能を有していることが考えられる。しかしながら、これまでの動機づけおよび感情研究において劣等感とは扱われておらず、精神保健や臨床心理などの領域で研究されてきた。そこでは臨床的な観点から劣等感の内容や対処行動について報告しているが、動機づけ研究の観点から劣等感とモチベーションとの関連を検証した研究は非常に少ない。そこで本研究は、達成動機における感情の役割に着目し、達成動機と劣等感との関連を検証することを目的とする。

2. 方 法

2.1 調査対象

2009年8月から10月にかけて、大学生を対象に質

* 順天堂大学大学院スポーツ健康科学研究科
Graduate School of Health and Sports Science,
Juntendo University

表1 劣等感を感じたことがある群とない群の人数比と各尺度のt検定の結果

	人数比		達成動機合計得点			自己充實的			競争的			劣等感		
	n	構成比(%)	平均値	SD	t値	平均値	SD	t値	平均値	SD	t値	平均値	SD	t値
ある群	167	72.3	122.7	13.1	2.42*	71.4	9.5	3.32**	51.4	7.9	-0.12	67.8	13.3	2.11*
ない群	57	24.7	117.8	13.8		66.4	10.1		51.4	8.1		63.5	13.1	

問紙調査を行った。有効回答者数は231名(M=19.8, SD=0.89)であった。そのうち、男性141名(M=19.9, SD=0.96)、女性90名(M=19.6, SD=0.71)であった。

2.2 質問紙の構成

(1) フェイスシート

個人属性(年齢・性別)に加えて、①これまでに劣等感を感じたことはありますか(回答者224名)、②どのような劣等感ですか(回答者140名)、③劣等感に対してどのように対処していますか(しましたか)(回答者131名)の3項目について自由記述を求めた。

(2) 達成動機

堀野(1987)の達成動機測定尺度を使用した。自分にとって価値あることを成し遂げようとする動機である自己充實的達成動機と、社会的・文化的に価値あることを成し遂げようとする動機である競争的達成動機の二因子構造の尺度である。「人に勝つことより、自分なりに一生懸命やることが大事だと思う」「競争相手に負けるのはくやしい」「世に出て成功したいと強く思っている」など全23項目からなり、7段階で評定を求めた。

(3) 劣等感

豊田(2002)の劣等感尺度を使用した。一因子構造で、「多くの人にひけめを感じる」「何かにつけて自信がない」「理想の自分と今の自分にギャップを感じる」「意見ははっきりと述べるほうだ(逆転項目)」など全34項目からなり、3段階で評定を求めた。

3. 結果

(1) フェイスシート

① これまでに劣等感を感じたことはありますかという質問では、あると答えた人(n=167, 72.3%)、ないと答えた人は(n=57, 24.7%)、無回答は(n=7, 3%)であった。

次に劣等感を感じたことがある群とない群に分け、達成動機と劣等感の得点に差があるか否かを比較するためt検定を行った。その結果、達成動機合計得点、自己充實的達成動機、劣等感において、ない群よりもある群のほうが有意に高い得点を示した(表1)。

② どのような劣等感ですかという質問では、自由記述にて記入された内容から、「容姿」(n=45, 32.1%)、「性格」(n=13, 9.3%)、「学力」(n=8, 5.7%)、「体力」(n=21, 15.0%)、「能力」(n=47, 33.6%)、「併発(上記項目について2つ以上を記入)」(n=6, 4.3%)が分類された。

次に上記の分類別に達成動機、劣等感の得点を比較するため、一元配置の分散分析を行った(表2)。その結果、劣等感において有意な群間差が認められた。TukeyのHSD法による多重比較を行ったところ、「学力」群と「併発」群との間に有意な得点差が認められた(p<.05)。「学力」群は劣等感が低く、「併発」群は劣等感が高い傾向が見られた。

③劣等感に対してどのように対処していますか(しましたか)という質問では、自由記述にて記入された内容から、「努力・練習」(n=61, 46.6%)、「代理補償」(n=24, 18.3%)、「逃避・回避」(n=23, 17.6%)、「開き直る・受け入れる」(n=23, 17.6%)の4項目が分類された。このことから、動

表2 劣等感の種類と達成動機, 劣等感の得点および一元配置の分散分析の結果

	容 姿		性 格		学 力		体 力		能 力		併 発		一元配置の 分散分析 (F 値)
	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	
達成動機合計	121.9	12.6	121.8	14.2	125.5	13.5	121.1	11.5	125.9	12.7	117.8	12.8	0.93
自己充實的	72.2	9.3	71.6	11.8	74.1	9.7	69.2	5.3	72.9	9.5	68.2	11.1	0.75
競争的	49.8	8.1	50.2	9.3	51.4	6.5	51.9	7.5	53.0	7.6	49.7	4.2	0.96
劣等感	66.8	11.1	69.5	14.3	59.4	10.4	70.3	12.2	66.4	13.0	80.7	6.3	2.55*

表3 劣等感の対処行動と達成動機, 劣等感の得点および一元配置の分散分析の結果

	努力・練習		代理補償		逃避・回避		開き直る・ 受け入れる		一元配置の 分散分析 (F 値)
	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	
達成動機合計	125.0	12.1	128.3	11.1	119.3	14.6	122.7	11.4	2.31*
自己充實的	73.5	8.7	75.4	8.2	68.7	10.0	72.3	8.2	2.58*
競争的	51.5	8.1	52.9	7.4	50.7	8.9	50.3	7.2	0.49
劣等感	67.1	12.9	59.5	10.5	74.0	12.1	66.0	11.2	5.64**

機づけの方向性は「欠陥の克服」「代理補償」「逃避・回避」「欠陥の受容」と言える。

上記の分類別に達成動機, 劣等感の得点を比較するため, 一元配置の分散分析を行った(表3)。その結果, 競争的達成動機を除くすべてにおいて有意な群間差が認められた。TukeyのHSD法による多重比較を行ったところ, 「代理補償」群と「逃避・回避」群との間に, 自己充實的達成動機, 劣等感において有意な得点差が認められた($p < .05$)。このことから, 「代理補償」群は達成動機が高く, 劣等感が低いことが明らかとなった。その一方で, 「逃避・回避」群は達成動機が低く, 劣等感が高いことが示された。

(2) 達成動機と劣等感との相関分析

達成動機と劣等感との関連を検証するため両尺度間で相関分析を行った(表4)。その結果, 達成動機合計得点, 劣等感合計得点において弱い相関が認められた。

表4 達成動機と劣等感との相関

	達 成 動 機		
	達成動機合計	自己充實的	競争的
劣等感	-.166*	-.243**	-.023

** $P < .01$, * $P < .05$

4. 考 察

(1) 分析の視点

これまでの劣等感研究では主に否定的な感情の側面に主眼が置かれ, 自信欠如の度合いが劣等感の強さとして測定されている。さらにその傾向が社会的にも広く認知されているため, 本研究の質問紙においても劣等感の両極性は正確に測定されていないことが考えられる。被調査者においても劣等感に対する認識は千差万別であり, 人よりも劣っていると感じてそれを否定的な感情と捉えなければ劣等感ではないと認識する人も存在するだろう。それゆえに, 本研究で行った質問紙による分析の多くは「劣等感のネガティブな側面がどのように達成動機と関連しているか」という側面を特定化し, 確かな結果

を導出しているか否かは推察の域を出ない。しかしながら、自由記述から得られた回答からは、劣等感からポジティブな動機づけが生起されていることが示されている。これらはMcClelland(1987)が報告するように、感情から達成行動が生起される一連のプロセスを支持するものであると考えられる。

(2) 達成動機と劣等感の関連

本調査において、全体の7割以上の大学生がこれまでの人生のなかで劣等感を認知した経験があることが明らかとなった。また、3割弱の大学生が劣等感を感じたことがないと回答している。このような一群は劣等感を否定的な感情と捉えず、劣等感そのものを認知していない(または何が劣等感であるかが解っていない)ということが考えられる。

劣等感を認知したことがある群は達成動機と劣等感において有意に高い得点を示した。このことから、劣等感の存在を認知することは、劣等感の強度が増す傾向がある半面、達成動機を高めるバネの役割にもなっていることが想定される。

また、劣等感の種類として「容姿、性格、学力、体力、能力」の5項目が分類された。これらの種類を2つ以上併記している人は「併発」と分類した。井上(1987)は「能力要因・性格行動要因・身体要因・社会経済要因」の4種類を報告しており、本調査では社会経済要因に関する回答は得られなかった。これは、大学生は社会人と比較して自立性が低いために、経済面や地位など社会的項目において記述が得られなかったと考えられる。次に劣等感の種類ごとに多重比較を行ったところ、劣等感において「学力」群と「併発」群に有意な群間差が認められた。「学力」群は劣等感の得点が最も低く、学力に対する劣等感を肯定的に捉えていることが推察される。その反対に「併発」群は劣等感が最も高く、2つ以上の項目で劣等感を感じている人は否定的に劣等感を捉えている傾向が認められた。

劣等感への対処行動として、「努力・練習、代理補償、逃避・回避、開き直る・受け入れる」の4項目が分類された。すなわち、「欠陥の克服」「代理補償」「逃避・回避」「欠陥の受容」のいずれかに動機

づけられると言える。そのうち、4割以上の大学生が自身の欠陥に対して努力や練習で克服した(しようとしている)ことが認められた。各対処行動と3尺度で一元配置の分散分析を行った結果、「代理補償」群は達成動機が高く、劣等感が低いことが明らかとなった。このことから、ある劣等感に対して直接努力や練習で克服しようと動機づけるよりも、自身の得意な分野で代理補償を行う方が達成動機は高いと言える。その一方で、「逃避・回避」群は達成動機が低く、劣等感が高い。従って、劣等感は「逃避・回避」するのではなく、その他の対処行動を選択することで解決を図るという考え方が大切であろう。

相関分析の結果からは、達成動機と劣等感には弱い負の相関が認められた。劣等感を感じたことがある人は達成動機が高いという結果と反対であるが、これは劣等感尺度が主に劣等感の否定的な側面を測定していることが影響していると考えられる。すなわち、劣等感を感じたことがあると回答した人のなかには、劣等感を肯定的に捉えている人も含まれており、その一群は劣等感を感じたことはあるが劣等感尺度の得点は低く、達成動機が高いことが考えられる。従って、相関分析からは否定的な劣等感と、達成動機の間には弱い負の相関があると言えよう。

5. 結 論

本研究では、劣等感は必ずしも動機づけに対する抑制的要因として作用するだけでなく、場合によっては動機づけを高め、克服への努力を喚起させる機能を有することが明らかとなった。本研究結果から達成動機における劣等感の役割として下記のことが認められた。

①大学生の7割以上が劣等感を認知しており、この一群は達成動機と劣等感が共に高い。②劣等感の種類は「容姿、性格、学力、体力、能力」がある。③劣等感の対処行動は「努力・練習、代理補償、逃避・回避、開き直る・受け入れる」がある。すなわち大学生は「欠陥の克服、代理補償、逃避・回避、欠陥の受容」のいずれかに動機づけられる。④「代

理補償」群は達成動機が高く、劣等感が低い。⑤「逃避・回避」群は達成動機が低く、劣等感が高い。⑥達成動機と劣等感には弱い相関がある。

今後、肯定的に認知している劣等感も測定できる包括的な測定方法の開発が望まれる。Adler(1938)が劣等感に着目するに至った人間行動の究極的な動因である「権力の意志」、その根底にある広義の劣等感を実証できるよう、概念の再定義と測定方法の開発が必要だと考える。

(当論文は、平成21年度順天堂大学大学院スポーツ健康科学研究科の修士論文を基に作成されたものである。)

参考文献

- 1) Adler, A. 1938 *Social Interest: A Challenge to Mankind*. Faber and Faber Ltd.
- 2) Adler, A. 1973 *Menschenkenntnis*. Fischer Taschenbush Verlag. (高尾利数(訳)1987 人間知の心理学 春秋社)
- 3) Ansbacher, H. & Ansbacher, R. R. 1956 *Individual Psychology of Alfred Adler*. Basic Books, Inc.
- 4) Atkinson, J. W. 1964 *An introduction to motivation*. Princeton, NJ: D. VanNostrad.
- 5) 遠藤辰雄ほか 1992 セルフ・エスティームの心理学 ナカニシヤ出版
- 6) 速水敏彦 1995 内発と外発の間に位置する達成動機づけ 心理学評論38, pp. 171-193.
- 7) 速水敏彦 1993 外発的動機づけと内発的動機づけの間 リンク信条の検討, 名古屋大学教育学部紀要, 教育心理学科, 40, 77-88.
- 8) 堀野 緑 1987 達成動機の構成因子の分析 教育心理学研究35, pp. 148-154.
- 9) 堀野 緑, 森 和代 1991 抑うつとソーシャルサポートとの関連に介在する達成動機の要因, 教育心理学研究, 39(3), 308-315.
- 10) 高坂康雅 2008 自己の重要領域からみた青年期における劣等感の発達的变化 教育心理学研究, 56, pp. 218-229.
- 11) 高坂康雅 2009 青年期における容姿・容貌に対する劣性を認知したときに生じる感情と反応行動との関連 教育心理学研究, 57, 1-12.
- 12) 高坂康雅 2009 青年期における容姿・容貌に対する劣性を認知したときに生じる感情と反応行動との関連 教育心理学研究 57, pp. 1-12.
- 13) Lundin, R.W. 1989 *Alfred Adler's basic concepts and implications*. Accelerated Development Inc. (前田憲一(訳)1998 アドラー心理学入門 一光社)
- 14) McClelland, D. C., Atkinson, J. W., Clark, R. A., & Lowell, E. L. 1953 *The achievement motive*: New York: Appleton Century Crofts.
- 15) McClelland, D. C. 1987 *Human Motivation*. Cambridge: Cambridge University Press. (梅津祐良, 藪部明史, 横山哲夫(訳)2005 モチベーション—「達成・パワー・親和・回避」動機の理論と実際— 生産性出版)
- 16) 水野基樹ほか 2008 モチベーション研究における動機概念に関する理論的整理—McClellandの所説に基づいて— 千葉経済大学短期大学部研究紀要4, pp. 51-61.
- 17) 宮城音弥 1970 劣等感 朝日新聞社
- 18) 宮本美沙子ほか 1995 達成動機の理論と展開 金子書房
- 19) 中島義明ほか 1999 心理学辞典 有斐閣
- 20) 関 計夫 1981 劣等感の心理 金子書房
- 21) Smith, E. E., Fredrickson, B. L., Nolen-Hoeksema, S. N. and Loftus, G. R. 2003 *Atkinson & Hilgard's introduction to psychology 14th edition*. Thomson: Wadsworth. (内田一成(監訳)2005 第14版ヒルガードの心理学 プレーン出版)
- 22) 豊田秀樹 2002 項目反応理論—新しい心理テストの構成法—, 朝倉書店
- 23) 上淵 寿 2004 動機づけ研究の最前線 北大路書房
- 24) 上淵 寿 2008 感情と動機づけの発達心理学 ナカニシヤ出版
- 25) Weiner, B. 1972 *Theories of Motivation*. Rand McNally & Co, U. S. (林 保・宮本美沙子(監訳)1989 ヒューマン・モチベーション—動機づけの心理学— 金子書房)

(平成21年12月9日 受付)
(平成23年1月20日 受理)